

風土を温める

シリーズ 高山の文化財 ⑦

高山市三町伝統的建造物群保存地区

【国選定重要伝統的建造物群保存地区】

高山市三町伝統的建造物群保存地区（略称・伝建地区）は「古い町並み」とも称されています。江戸時代から明治時代にかけて建てられた建物の姿をほぼそのまま残している貴重な町並保存地区です。

高山の町は天正十四（一五八六）年、飛騨国の領主となった金森長近によってその基礎が築かれました。天正十六（一五八八）年、高山城築城とともにまちづくりが始まり、城を取り囲む高台を武家屋敷、東側の山すそを東山寺院群、一段低いところを町人の町としました。

この町人町の一部が現在の伝建地区です。元禄五（一六九二）年、金森家は出羽国へ国替えになりましたが、その後も高山の町は飛騨国の商業経済の中心地として栄え、旦那衆と呼ばれる裕福な町人を中心に上質で特色ある文化が築かれていきました。明治以後、何度か火災に見舞われましたが、その都度ほぼ従来の形



美しい家並みに藤の花が映える（上三之町）

で再建されています。また、空襲の被害を受けず、戦後も大きな火災が起きなかったため、江戸時代さながらの町の姿をよくとどめています。

通りの両側には木造の町家が連続して並び、各家の正面には紅殻格子（べんがらごうし）が取り付けられています。屋根は大きく前方に張り出し、軒の高さは約四〜五メートルと低く、連続してよく揃っています。小庇を支える腕木の先が白く塗られています。胡粉塗りと

呼ばれるもので、本来は木材の乾燥による割れを防ぐための工夫でした。その白色と黒っぽい紅殻塗りの対比は、町並みをより深く印象づけています。建物は見られることを意識した洗練されたデザインで、かつての町衆の高い美意識を反映しているといえます。

*

この貴重な町並み景観の保存に取り組まれるようになったきっかけは、住民の間に町並みを再認識する機運が高まっていたことが挙げられます。

昭和四十一年二月に、町並み景観保存のための最初の組織である上三之町町並保存会（現在の恵比須台組町並保存会）が住民自らの手によって作られました。さらに二つの保存会が相次いで結成され、自主的な申し合わせの中で町並みを守ろうという機運が盛り上がりました。通りの電柱が撤去されたのもこのころです。

行政も文化財保護法に基づく伝建地区の選定を目指して動き、昭和五十四年二月三日、重要伝統的建造物群保存地区「高山市三町」として文部省（当時）の選定を受けました。その後、国・県・市の助成により、建物の保存修理や景観整備、防災対



開放的な内部の吹き抜け

策などが進められました。

このように住民の自発的な行動によって始まった取り組みは、その町並みの水準の高さとともに全国的にも高い評価を得ています。一方、駐車場対策・交通安全対策や、少子高齢化などの課題はありますが、市民や行政が協力して、大切な町並みを残す努力が続けられています。

〈区域〉 神明町四丁目、上一之町、上二之町、上三之町、片原町の各一部

〈面積〉 約四・四ヘクタール

〈種別〉 商家町

〈町並保存会〉 恵比須台組町並保存会、上三之町町並保存会、上二之町町並保存会、片原町町並保存会